

幼児に対する理解と態度の関連

— 教育実習生の視点 —

吉村智恵子

The Relationship between Teacher's Attitude and Understanding Children : From the Viewpoint of Student Teachers

Chieko YOSHIMURA

1. 目的

幼稚園での保育は、現行の幼稚園教育要領（文部省，1989）によれば、その基本は「幼児期の特性を踏まえ環境を通して行う」ことにある。この人間形成の基礎を培う時期でもある幼児期の特性を踏まえながら、保育者は、自らを幼児に多様な影響を与える人的環境としつつ、様々な環境を通して保育を行っている。人的環境である保育者は、幼児個々の発達や特性の見定め、幼児の日常的な行動の意味理解、幼児の存在そのものに対する受けとめといった「幼児理解」と、環境を通しての働きかけ、直接的な援助・指導といった「関わり」とを日常的な保育行動として行っているといえることができる。

これらの保育行動である「幼児理解」と「関わり」について、保育者を対象とした調査により検討した結果、保育者は幼児の行動傾向に応じて画一的な一定の対応をするのではなく、幼児の行動傾向に対する各保育者の理解のしかたに応じて対応を決定しており、その対応の仕方には保育者の経験年数も要因として影響していることが分かった（吉村，1997）。

そこで、将来保育者になることを目指す学生の「幼児理解」と「関わり」についても明確にすることにより、保育者の保育行動の経験的な発達を検討していく必要がある。一般に、保育者は、幼児に継続的に関わることにより、「この子にはいつもこのようにはたらきかけ、こう援助している」というような「関わり」を実際に行動にし、自分の「関わり」を自覚している。しかし、学生はそのような実際の「関わり」に関する経験や自覚をあまりもっていない。経験といえるのは教育実習である。短期間ではあるが、学生は幼児と直接関わり、観察し、自分なりの幼児理解をし、保育者と幼児との関わりに対する何らかの見解を持つようになると考えられる。机上の理想論だけではなく、「このような子にはこういう関わりをするとよいと思う」といった「関わりに関する態度」をもち得るといえることになる。従って、保育者と同様な「関わり」という観点で、学生の幼児に対する「関わり」を問うことは困難であるが、どう関わっていくかを決定する「態度」を問うことはできる。

本研究では、学生が幼稚園あるいは保育所での教育（保育）実習を通じて、実際に出会った幼児に対して行った「幼児理解」がどのような視点で行われているかを明らかにすること、さらに、「幼児理解」と「幼児への関わりに関する態度」との関連を検討し、学生の段階で「幼児理解」と「関わり」がどのように影響し合っているかを分析することの2点を目的とし、「幼児理解」と「関わり」に関する保育者の経験的な発達をみていくための資料とする。

2. 方法

1) 調査期日と対象

1997年4月22日 N女子大学児童教育学科4年生 70名 (女性のみ)

1997年6月20日 S大学幼児教育学科4年生 44名 (男性4名・女性40名)

いずれも幼稚園及び保育所での2週間あるいは3週間の実習終了直後の授業時に、調査用紙(資料参照)を配布しその場で回答を求め、回収した。

2) 回答者年齢 平均年齢21.4歳 (SD=1.34) 範囲21歳から32歳

3) 調査項目

実習期間中に接した幼児(3歳児から5歳児を対象)の中から「気になる子」を一人思い浮かべ、その幼児について以下の項目について回答を求めた。

①「気になる子」の年齢・性別・保育年数

② 気になった点の自由記述

③「気になる子」と回答者(実習生)との具体的なエピソード(自由記述)

④「気になる子」に対する「幼児理解」と「関わり方」

a: 回答者(実習生)が「気になる子」に対して抱いている気持ちと「気になる点」に対する考えに関する質問項目(27項目: Q1-27)

b: 回答者(実習生)が「気になる子」の担任であったら、どのように関わるかという態度に関する質問項目(25項目: Q28-52)

c: 「気になる子」と担任保育者との関係に関する質問項目(9項目: Q53-61)

全61項目について5点尺度での回答を求めた。

⑤対象幼児を「気になる子」としたことについて

この調査では、回答者が漠然とした幼児像を思い浮かべ、理想的な見方や関わり方を回答するのではなく、任意に選び出された幼児を思い浮かべながら回答することを求めたかった。

従って、「一番印象に残った」幼児であっても構わないのであるが、保育者に近い位置にある学生がどのような視点で幼児を見ているかを知るためには、幼児のどこに注意を向けるかということも重要なことである。そのために、「気になる子」という言葉による投げかけを試み、回答を求めた。

気になる子については、藤崎春代ら(1992)は、園生活においてちょっと気になる子どもたちという表現の中で、「はたらきかけようとすると逃げてしまう子」「場面や相手におかまいなしに話しかける子」「周囲をしらけさせてしまう子」などをあげている。これらは、障害児の枠には入らないが、園生活の中で妙であり、園以外では問題があるとはいわれない。

しかし、保育者は「これでいい」と自信を持って言い切れないような問題としている。

他に「気になる子(ども)」を考察の対象とした研究は、大場ら(1992)、前原(1994)、刑部(1994)、西垣ら(1996)、五藤ら(1996)などがある。いずれも、発達上の障害はなく保育にあたって保育者が気になる状況を示す子、あるいは保育者との関係の中で気になる状態にある子を指している。

4) 分析手順

①61項目に対する回答から因子を抽出し、「幼児理解」と「関わりに関する態度」の回答傾向を探る(バリマックス回転法)。

②各回答者の因子得点を算出し、クラスター分析により回答者をグループ化する。

③各クラスターの回答者の「幼児理解」と「関わりに関する態度」の関連の特徴を検討する。

3. 結果と考察

1) 項目別回答

質問項目ごとの回答を「まったくあてはまらない」1点、「どちらかというにあてはまらない」2点、「どちらでもない」3点、「どちらかというにあてはまる」4点、「よくあてはまる」5点として、全回答の項目ごとの平均値 (M)、標準偏差 (SD) を算出した結果、特に平均値の高い項目と低い項目は以下ようになった (表1-①、②)。

①平均値の高い項目をみるため、回答の平均値の高い順に並べ、第9位と第10位との間に差が見られたので、上位9項目を示した。特にQ42と36は、最小値が2と高かった。

②平均値の低い項目をみるため、回答の平均値の低い順に並べると第2位と第3位との間にやや大きな差が見られ、あとは特に大きな差は見られなかったので、平均値2.55以下の第9位までの項目を示した。全項目の中でQ54だけが最大値4であった。

表1-①平均値の高い項目

質問文 (項目番号)	M	SD	最大値	最小値
Aの変化を注意深く見る (47)	4.51	0.67	5	1
Aの気持ちを受けとめる (39)	4.47	0.71	5	1
Aの動きを把握しようとする (29)	4.43	0.67	5	1
Aのよいところを引き出すようにする (42)	4.42	0.70	5	2
Aの気持ちを理解しようとする (44)	4.39	0.75	5	1
Aとよく話をする (41)	4.34	0.77	5	1
Aを見守るようにする (36)	4.30	0.77	5	2
Aの行動の意図を考えるようにする (35)	4.25	0.77	5	1
Aと他の幼児が関わるようにする (37)	4.23	0.81	5	1

表1-②平均値の低い項目

質問文 (項目番号)	M	SD	最大値	最小値
Aは担任を避ける (54)	2.04	0.94	4	1
他の実習生だったら気にならないかもしれない (8)	2.12	1.04	5	1
Aの気になる点についてA自身も困っている (19)	2.33	1.16	5	1
Aに関して幼稚園でやれることの限界を感じる (14)	2.34	1.16	5	1
Aにはなるべく手をかけないようにする (34)	2.38	1.05	5	1
Aの気になる点が目立たないようにする (33)	2.46	1.05	5	1
気になる点にあまり触れないようにする (51)	2.49	0.99	5	1
Aは他の子により影響を与えていた (2)	2.51	0.91	5	1
Aはかわいそうである (13)	2.53	1.11	5	1

(A: 「気になる子」を示す)

③実習生の「気になる子」に対する理解と関わりに関する態度の全体的な傾向

ほとんど「あてはまる」と答えている項目(表1-①)に該当しているのは、全て「もしも実習生が担任保育者だったら」という前提による「関わり」についての質問に対する回答である。「変化を注意深く見る」(47)「動きを把握しようと・・・」(29)「気持ちを理解・・・」(44)など、実習生が「気になる子」の行動を制限する方向にではなく、行動や気持ちをそのまま受けとめるという受容的な「関わり」が大切であると考えていることがわかる。また、「よく話をする」(41)や「よいところを引き出すようにする」(42)などから積極的にはたらきかける「関わり」をすると予想しているといえる。

また、ほとんど「あてはまらない」と答えている項目(表1-②)は、「気になる子」自身や「気になる点」についてのnegativeな「理解」に関する項目、例えば「かわいそうである」(13)「A自身も困っている」(19)「幼稚園でやれることの限界を感じる」(14)などをほとんどあてはまらないとしている。これは、「気になる子」についてpositiveな視点で理解しようとしていることを示している。そして、自分が担任であるなら「手をかけない」(34)「気になる点が目立たないようにする」(33)「気になる点にあまり触れないようにする」(51)など、消極的な「関わり」はしないだろうと考えているといえる。ただし、「他の子によい影響を与えていた」(2)「他の実習生だったら気にならないかもしれない」(8)の2項目もほとんどあてはまらないとしている。この項目は「気になる子」を実習中に会った幼児の中から選び出すときの視点に影響されていると考えられる。つまり、「他の子に好影響を与えるとは言いにくく、誰が見ても気になるような子」と「理解」している子を「気になる子」として抽出しているということである。

回答を単純に検討した結果は、実習生は「気になる子」をpositiveな視点で受容的に理解し、可能性を感じながら積極的に関わる態度が大切であると考えているということである。このような回答は、理想的な回答であるといえる。

2) 因子分析結果

61項目に対する実習生の回答の平均値からは、保育者が幼児に対してもつべき「理解」のしかたや「関わり」に関する態度が理想通りに表れたと見ることができる。しかし、それらの意識が本当はどのように関わり合っているかをさらに検討するために因子分析(主因子法、バリマックス回転法)を行った。その結果、次の5因子が抽出された。各因子に属する質問項目は表2に示す。

なお、全ての因子への因子負荷量の絶対値が0.30以下である項目及び2つ以上の因子において因子負荷量の絶対値が0.30以上である項目(24項目)は除外してある。

①因子Ⅰの8項目は、「気になる子」の気持ちや行動をそのまま受けとめ、把握・理解しようとする視点を問う項目と、「気になる子」に合わせて対応を選んで関わっていかうとしているかどうかを問う項目、すなわち「気になる子」の気持ちを主体にした関わりや活動の援助を試みているかどうかを問う項目からなっている。従って、この因子は「気になる子」の存在をそのまま受けとめ理解しようとする受容的(acceptant)理解の視点と、「気になる子」自身を主体とし、それに合わせて関わろうという応答的な(responsive)関わりの因子(A-R因子)と考えられる。

②因子Ⅱの7項目は、「気になる子」が担任保育者に対して示す関わりを見る項目となっており、信頼感ある関係を示す項目に正の負荷量がみられ、否定的な項目に負の負荷量がみられる。従って、この因子は「気になる子」が保育者を信頼し頼っているかどうかという視点で実習生が

表2 因子分析結果

質 問 文 (項目番号)	因子負荷量				
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V
Aの気持ちを受けとめる (39)	0.73	0.06	-0.04	-0.20	-0.10
Aの気持ちを理解しようとする (44)	0.72	0.00	-0.11	-0.03	-0.10
Aの変化を注意深く見る (47)	0.71	0.08	0.03	0.17	-0.10
Aの動きを把握しようとする (29)	0.68	-0.02	0.08	-0.06	0.03
Aとよく話しをする (41)	0.65	-0.02	-0.06	-0.13	-0.00
Aの行動の意図を考えるようにする (35)	0.64	0.04	0.10	-0.01	-0.10
Aの行動に即座に対応する (52)	0.41	-0.07	0.06	-0.09	0.18
Aを見守るようにする (36)	0.37	0.10	-0.07	-0.00	-0.00
Aは担任によく話しかける (55)	0.01	0.89	0.02	-0.03	0.05
Aは担任を頼りにしている (56)	0.08	0.85	-0.10	-0.03	0.04
Aは担任のそばによく来ている (58)	0.04	0.82	-0.04	0.03	0.09
Aは担任がそばにいと安心している (61)	0.04	0.71	-0.09	0.01	0.09
Aは担任と一緒に遊びたがる (59)	-0.14	0.70	0.01	0.03	-0.10
* Aは担任を避ける (54)	-0.01	-0.55	0.17	0.15	0.09
Aは担任をよく見ている (60)	0.03	0.54	0.06	0.12	-0.10
Aは困った存在である (10)	-0.02	-0.07	0.70	0.07	0.03
Aは扱いにくい (20)	-0.00	-0.06	0.70	0.05	-0.10
Aは周りをよく困らせる (23)	0.22	0.13	0.67	0.00	0.16
Aはかわいそうである (13)	0.06	-0.19	0.60	0.01	0.01
Aの気になる点は親子関係の問題ともいえる (15)	0.11	0.13	0.53	0.01	-0.10
Aの気になる点を抑えるようにする (32)	-0.06	0.00	0.53	0.16	0.19
Aに関して幼稚園でやれることの限界を感じる (14)	-0.11	-0.18	0.49	-0.01	-0.10
* Aは他の子により影響を与えていた (2)	0.14	0.08	-0.43	0.02	0.05
* Aがしたいことをやりやすいようにする (28)	0.21	-0.15	-0.43	-0.15	-0.00
Aの気になる点が目立たないようにする (33)	0.00	-0.03	0.40	0.31	0.07
Aの行動をうまくコントロールする (38)	0.11	-0.08	0.39	0.08	0.24
Aのことを周りの子どもたちも気にしている (25)	0.18	0.16	0.36	0.05	0.19
Aの気になる点は生活習慣の問題ともいえる (11)	-0.02	-0.01	0.35	0.05	0.23
Aにはなるべく手をかけないようにする (34)	-0.16	0.10	0.14	0.58	-0.10
* Aには個人的な関わりが大切である (21)	0.12	-0.21	0.21	-0.46	0.09
Aと他の幼児が関わるようにする (37)	0.12	-0.03	0.11	0.41	0.10
Aの気になる点は一過性の問題ともいえる (26)	0.01	-0.10	0.02	0.38	0.00
* Aの気になる点は個性ともいえる (22)	0.17	0.17	-0.12	-0.31	-0.20
Aのことはいつも気になった (1)	0.17	-0.19	0.19	-0.07	0.43
* Aの気になる点は幼稚園にいる時だけの問題ともいえる (7)	0.05	-0.09	-0.10	0.06	-0.40
Aの気になる点は発達的な問題ともいえる (24)	-0.01	-0.12	0.07	-0.10	0.39

(A:「気になる子」を示す) (*:逆転項目)

幼児の担任に対する信頼度 (reliability) をみている因子 (R 因子) と考えられる。

③因子Ⅲの13項目は、「気になる子」にみられる「気になる点」を問題だと感じ、その行動を理解したり適切に対応することが難しいとnegativeな視点での理解を問う項目と、「気になる子」の行動を抑制するような方向性をもった関わり方の項目からなっている。従って、この因子はnegativeな理解と抑制的な (controlled) 関わり方の因子 (N-C 因子) と考えられる。

④因子Ⅳの5項目は、「気になる子」を特別視しないでそのままとらえる視点についての項目と、大人との関わりではなく、他の幼児と関わりを持たせようとするかどうかを問う項目からなっており、因子Ⅴの3項目は、「気になる子」の問題の重さを感じている項目である。因子Ⅳ・Ⅴともに項目数が少なく特徴の把握が不可能であった。

⑤特徴が明らかになったⅠ-Ⅲ因子から、実習生の幼児に対する「理解」と「関わり」の間には「受容的理解」と「幼児の主体性を重視した応答的な関わり」、「否定的理解」と「幼児を抑制する関わり」という深い関連があることが分かった。これらを「理解」という視点から見ると「受容的」-「否定的」の軸があり、「関わり」の視点には「応答的」-「抑制的」の軸があると考えられる。

3) クラスタ分析結果

因子分析により、実習生の幼児に対する「理解」と「関わり」との間にあるつながりは明らかになった。しかし、各個人は単に「受容的な理解をしつつ、応答的な関わり」をする人、「否定的に理解し、幼児の行動を抑制する関わり」をする人に分けられるのではない。ここでは、因子分析により算出された因子得点により回答者をグループ化するクラスタ分析 (最短距離法) を行い、回答者の持つ特徴を明らかにすることを試みた。主な結果を以下に示す。

①全回答者は、10クラスタに分けられた (図1・表3)。

②最も多くの回答者73名 (64.0%) が属した第1クラスタ (表4) は、因子Ⅰ (A-I 因子) の得点がマイナスであることが特徴となっている。このことから、ほとんどの実習生は、「気になる子」について、子どもの姿を見守り・気持ちをそのまま受けとめつという理解をし、子どもの主体性にそった応答的な関わりをもとうとするという因子がマイナスに傾いているグループである。回答者全体の中でプラスとなった他のクラスタに比べて、因子Ⅰのような保育行動を選び取ることも、幼児の保育者に対する信頼度の高さを感じていることが分かる。

③第2クラスタ (表4) には因子Ⅰ (A-I 因子) と因子Ⅲ (N-C 因子) がプラスであり因子Ⅱ (R 因子) がマイナスの回答者9名が属している。

担任保育者に対する幼児の信頼度を低く見ている実習生が、「理解」「関わり」について反対の行動を示す2つの因子ともに強く選んでおり、保育者と幼児との関係を不安な目でとらえ、自分はこういう保育行動をとるということをはっきりと示したグループといえる。言い換えるならば、第Ⅰ・Ⅲ因子共に高く、対象児に多様に関わろうとしているのは、第Ⅱ因子の示す保育者と「気になる子」の信頼関係の悪さを感じているせいかもしれない。

④第3クラスタ (表4) には、因子Ⅰがプラス、因子Ⅱ・因子Ⅲがマイナスとなる回答者5名が属している。「担任保育者と幼児との信頼関係」、「否定的理解と抑制的関わり」という保育行動をいずれも他の回答者より低くとらえ、「受容的理解と応答的関わり」をより高く選択している回答者のグループである。

以上の結果から、回答者の多くは、「気になる子」に対して「受容的理解-応答的関わり」という保育行動をとることにやや否定的であり、教育実習生として、幼児の保育者への信頼感を感じ取る傾向にあるといえる。反対に幼児の保育者に対する信頼感を感じていない回答者の方

が「受容的-応答的」保育行動を選択する傾向にあったということがいえる。

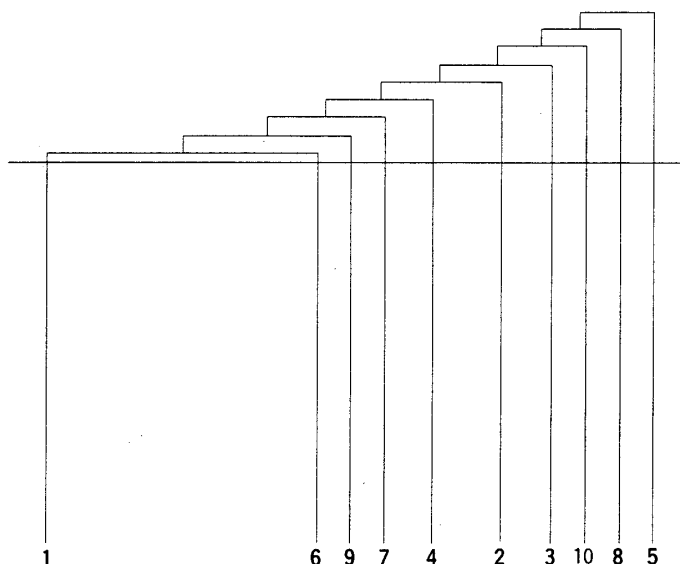


図1 クラスタ分析樹形図

表3 クラスタ規模表

クラスター	人数 (%)
1	73 (64.0)
2	9 (7.9)
3	5 (4.4)
4	5 (4.4)
5	4 (3.5)
6	4 (3.5)
7	4 (3.5)
8	4 (3.5)
9	4 (3.5)
10	2 (1.8)
計	114 (100.0)

表4 主なクラスターの標準因子得点 (+・-)

クラスター	A-I因子	C因子	N-C因子
1	-0.30	0.16	-0.04
2	0.93	-0.89	0.75
3	0.63	-0.55	-0.87
4	0.70	1.16	-0.74
5	-1.76	-0.92	0.46

4) 全体的考察

教育実習生の「幼児理解」と「関わりに関する態度」の間にみられた関連は、2点ある。1点は、幼児の気持ちや行動をそのまま受けとめ、幼児の姿を把握・理解していこうという「受容的な幼児理解」と幼児の主体性を重視しながら幼児の行動を見守り、対応していこうとする「応答的な関わり」とが同一因子（因子I）内にあるという点である。もう1点は、「気になる子」にみられる「気になる点」を問題だと感じ、その行動を理解したり適切に対応することが難しいというnegativeな視点で理解するという「否定的理解」と幼児の行動をなるべく目立たないようにしようとする「抑制する関わり」とが同一因子（因子III）内に入る点である。この2点についてさらに「理解」という視点からみると「受容的」-「否定的」の軸があり、「関わり」の視点からみると「応答的」-「抑制的」の軸があると考えられる。他の先行研究（杉村・桐山1991、細川・若林1992）では、保育者を対象としているものであるが、「関わり」には、受容-統制、共感-拒否の軸があり、保育者はその中のいずれかに位置する関わりを選択していることになり、今回の教育実習生の結果とも一致する。軸の中での分布を検討すると、実習生の多くは、「気になる子」に対する「受容的理解-応答的関わり」ということをやや否定的にみており、幼児の保育者への信頼はあると認知しており、一部に見られた保育者への幼児の信頼度が低いと認知している回答者は、「受容的-応答的」保育行動も「否定的-抑制的」保育行動

も選択する傾向にあるということがいえる。

以上のことから、実習生の「幼児理解」と「関わり」には保育者と類似した構造がみられると共に、「気になる子」に対する保育行動には、実習生として観察した担任保育者と幼児との関係をどのように認知するかに影響を受けていると考えられる。

要 約

本研究は、教育実習生が実際に出会った「気になる子」に対する「幼児理解」と「幼児への関わりに関する態度」について検討し、学生の段階で「幼児理解」と「幼児への関わり」がどのように影響し合っているか分析することを目的とした。114名の教育実習生（教育実習終了直後）に61項目から成る「幼児理解」と「幼児への関わりに関する態度」についての調査を行い、因子分析の結果、実習生の幼児に対する「理解」と「関わり」の間には「受容的理解」と「幼児に対する応答的な関わり」、「否定的理解」と「幼児を抑制する関わり」が関連していた。また、クラスター分析により、実習生の大部分は「気になる子」が担任保育者を信頼していると認知しており、自分は「気になる子」に対して「受容的理解－応答的な関わり」という保育行動をとることをやや否定的にとらえている。保育者と幼児との信頼度を低いと認知している一部の実習生は、「受容的－応答的」保育行動と「否定的－抑制的」保育行動の両者を選択する傾向にある。教育実習生は、保育者と同様な「幼児理解」と「関わりに関する態度」をもっているが、幼児に対する保育行動は、担任保育者と幼児との関係をどのように認知するかに影響を受けていると考えられる。

本論は、平成9年度名古屋女子大学教育研究所研究助成による。

文 献

- 藤崎春代・西本絹子・浜谷直人・常田秀子（1992）『保育の中のコミュニケーション－園生活においてちょっと気になる子どもたち－』。ミネルヴァ書房。
- 五藤葉子・石橋尚子（1996）園生活で気になる子どもたち。日本保育学会第49回大会。440-441
- 刑部郁子（1994）子どもの「参加」を支える他者－集団における相互作用の関係論的分析－。東京大学教育学部紀要。34.21-30
- 細川政宏・若林明美（1992）保育者の幼児への関わり行動と保育観との関係について（その1）（その2）。日本保育学会第45回大会。432-435
- 文部省（1989）幼稚園教育要領。
- 前原寛（1994）気になる子を捉える視点－子どもを取り巻く状況を中心として－。日本保育学会第47回大会。514-515
- 西垣吉之・寺見陽子他（1996）気になる子を理解する視点に関する研究Ⅰ－保育者の気になる子どもを見る視点－。日本保育学会第49回大会。876-877
- 大場幸夫・梅田優子（1992）保育者が気になる子どもを捉える視点としての関係性について（2）。日本保育学会第45回大会。756-757
- 杉村伸一郎・桐山雅子（1991）子どもの特性に応じた保育指導－Personal ATI Theoryの実証的研究。教育心理学研究。39.1.31-39
- 吉村智恵子（1997）保育者の幼児理解と関わりに関する分析。聖和大学大学院教育学研究科修士論文。

幼児に対する理解と態度の関連

資料 調査用紙 (一部省略)

保育に関するアンケート

アンケートのお願い

幼稚園教育実習は充実したものだったでしょうか？
このアンケートは、実習中の経験に基づいてお答え頂き、皆さんの保育についてのお考えを聞くものです。
お答え頂いた個々の回答を研究以外の目的に使用することはありません。
ご協力をよろしくお願いします。

回答される方ご自身について以下の項目について、下線部に必要事項を書き込むか、番号に○をつけてお答え下さい。

1. 学年 1. 短期大学 1年 <略> 4. 4年制大学 4年
2. 性別 1. 男 2. 女
3. 年齢 _____ 歳
4. 実習園は 1. 公立幼稚園 2. 私立幼稚園 3. 公立保育園 4. 私立保育園
5. 実習クラスについて
 - 1) 学年 1. 3歳児クラス 2. 4歳児クラス 3. 5歳児クラス
4. その他 ()
 - 2) 幼児数 _____ 名 (男児 _____ 名・女児 _____ 名)
 - 3) 担任数 1. 1名 2. 2名 3. その他 ()
 - 4) 実習生 _____ 名

保育実習中に、特に障害があるというわけではないけれども、何となく“**気になる**”という子に出合ったのではないのでしょうか。いま実習を終え、今回実習で接した子どもたちの中の**気になる子**を一人思い浮かべて以下の問いにお答え下さい。

いずれも、下線部に必要事項を書き込むか、番号に○をつけてお答え下さい。

1. 気になる子について
 - 1) 性別 1. 男児 2. 女児
 - 2) 保育年数 1. 3年保育の1年目 (現在3歳児クラス)
<以下2.-6.略>
2. 気になる点について
 - 1) 気になったきっかけはどんなことでしょうか
 1. 担任の先生にいわれて 2. 自分で接していて 3. 観察していて
 4. 他の実習生にいわれて 5. その他 ()
 - 2) その子のどのような点が気になるかを教えて下さい。<自由記述>
 - 3) あなたとの関わりで具体的なエピソード (出来事など) があればお書き下さい。<自由記述>
3. 2で記入していただいた**気になる子**に対してあなたの感じ方、考え、関わり方などは、以下に示す項目のそれぞれにどのぐらいあてはまるでしょうか。1～5の段階からあてはまるものに○をつけて下さい。

質問項目中では

**気になる子をA
実習生であるあなたを私**
と表してあります。

	1	2	3	4	5
まったく		どちらかといえば	どちらでも	どちらかといえば	よく
あてはまらない		あてはまらない	ない	あてはまる	あてはまる

1) Aのことはいつも気になった	1	2	3	4	5
2) Aは他の子により影響を与えていた	1	2	3	4	5
3) Aの気になる点はうまく言葉に表わせない	1	2	3	4	5
4) Aは個性的である	1	2	3	4	5
5) 他の実習生の方がAのことにうまく対処できるかもしれない	1	2	3	4	5

- 6) Aを何とかしてあげたいと思う 1 2 3 4 5
 7) Aの気になる点は幼稚園にいる時だけの問題ともいえる 1 2 3 4 5
 <以下8), 10), 11), 19)–27) 略 本文表1, 2に掲載>
 9) Aは不安定である 1 2 3 4 5
 12) Aの存在が私を成長させてくれた 1 2 3 4 5
 <13)–15) 略 本文表1, 2に掲載>
 16) Aは集団の中でこそ成長すると感じる 1 2 3 4 5
 17) Aの気になる点は保育の仕方の問題ともいえる 1 2 3 4 5
 18) Aは幼稚園生活を楽しんでいる 1 2 3 4 5

4. もしもあなたが気になる子Aの担任だったら、以下に示す項目のそれぞれにどのぐらいあてはまるでしょうか。1～5の段階からあてはまるものに○をつけて下さい。

質問項目中では

**気になる子をA
担任であるあなたを私**
と表してあります。

1	2	3	4	5
まったくあてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらでもない	どちらかといえばあてはまる	よくあてはまる

- 28) Aがしたいことをやりやすいようにする 1 2 3 4 5
 29) Aの動きを把握しようとする 1 2 3 4 5
 30) Aに用事を頼むようにする 1 2 3 4 5
 31) Aのそばにいるようにする 1 2 3 4 5
 <以下32)–39), 41) 42) 44) 47) 51) 略 本文表1, 2に掲載>
 40) Aの気持ちを他の子に伝えるようにする 1 2 3 4 5
 43) 私からAに関わるよりAから私に関わってくるのを待つようにする 1 2 3 4 5
 45) Aに役割を与えるようにする 1 2 3 4 5
 46) Aが周りの様子に目を向けるようにする 1 2 3 4 5
 48) Aが好みそうな活動やあそびを用意する 1 2 3 4 5
 49) Aとの一対一での関わりを多くする 1 2 3 4 5
 50) Aと積極的に一緒に遊ぶようにする 1 2 3 4 5
 52) Aの行動に即座に対応する 1 2 3 4 5

4. **気になる子Aと担任**との関わりはどのように見えましたか、以下に示す項目のそれぞれにどのぐらいあてはまるでしょうか。1～5の段階からあてはまるものに○をつけて下さい。

質問項目中では

気になる子をA
と表してあります。

1	2	3	4	5
まったくあてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらでもない	どちらかといえばあてはまる	よくあてはまる

- 53) Aと担任との関係はよい 1 2 3 4 5
 <以下54)–56), 58)–61) 略 本文表1, 2に掲載>
 57) Aは担任の反応を気にしている 1 2 3 4 5

質問はこれで終わりです。

つけ忘れなどないかももう一度お確かめ下さい。

その他Aのことで今お考えになっていることがあれば自由にお書き下さい

<自由記述>

☆ご協力ありがとうございました。